

たじみ
昔話



多治見市大原町の昔話



絵本作製

たじみデジタル絵本クラブ

<http://enaehon.client.jp>

2008



ある日のこと、この茶店へ
ひとりのわかい武士がはい
ってきた。
「ばあさん、もちと、茶をい
っぱいくれぬか。」
「はい、はい。」
「ああ、ちよつとばあさん。
ここから根本まで、どのくら
いの道のりかな。」
「根本までなら、おおかた一
里ぐらいにもんじゃろう。」
「一里ほどか。うむ、たいし
たことはないのう。……で
は、茶をくれぬか。」



むかし、多治見の大原村
から、とうげをひとつこえ
て、根本村へぬける細い街
道があった。
そのころ、大原村の街道
ばたに小さな茶店が一軒あ
って、旅の人はみんなここ
でいっふくしては、また旅
にでかけていった
茶店のそばに、大きな松
の木が二本立っていたの
で、みんなこの茶店を「大
松の茶店」とよんでいた。
。



「それでもお武家さま、この先はな、せまい山道になっておるし、それに夜になると、とうげ道には、このごろ変化が出るというので、だれも日がくれてからは通らんようにしています。」

「ほほう。」

「お武家さま、悪いことは言わんに、出かけるのはあすの朝にしなされ。」

「いや、いや。これはおもしろいことを聞いた。わしが、こうしてひとり旅をしているのも武者修業のためじや。山中でなにが出ようとおそれることはない。」

ばあさんがいくらとめても聞き入れず、武士はどうとう茶店を出ていった。



日はとつぷりとくれ、あたりは、もう、うす暗くなっておった。茶店の前の田んぼでは、カエルがいっぱい鳴いておった。

「これから根本村へいきなさるようじやが、お武家さま、根本村へいくのは、あすになされたほうが……。」

ばあさんは、茶を出しながら言った。

「いや、そういうわけにもいかぬ。いっぷくしたらでかけねばならぬ。」



武士はとつさに、あやしいと思った。こんな暗いなかを女がひとりで歩くはずがない。茶店のばあさんから聞いた変化というのはこれだとさとつた。

武士のすがたを見て女も少しとまどったようすであつたが、やがて決心したように近づいてきた。

武士は間を心において身がまえ、女がころあいの所までくると、ぬきうちに、サット、一刀のもとにきりすてた。



武士は、まっ暗な街道を、ひとり根本村へ急いだ。しばらく行くと坂道にかかった。ようやく坂道を登りつめて、汗を拭こうとしたときだった。武士は思わず息をのんだ。

むこうから静かに、こちらに歩いてくる人かげが目にとまったからだ。

夜目にも見える、頭を白い布で包み、白い着物を着たすがたは、たしかに女である。



その時、どういふものか、
やいばが「カチン」と石に当
たったような音がした
武士は刀をおさめ、そのま
まふり向きもせず山をおり
ていった。



つぎの朝、武士がどうなっ
たことかと、茶店のばあさん
が、「鳥居が根」のとうげへい
つてみると、ふしぎなことも
あるものじゃ。
わかい女の人気が失っ
て、たおれていて、きのうま
であつた地藏さまの首が、ど
こへとんだものか、なくなっ
ていた。
でも、そのわけは、やがて
わかった。



女はどうげの下の村の者であつた。

子どもが病気なつたが、医者も薬もききめがなく、病氣は重くなるばかり。

このうえは、とうげの上の地藏さまに願をかけて、助けていただこうと思ひつた。

願をかけるといふのは、何日かの間、身も心も清めて人目につかぬ真夜中に、神様や仏様におまいりして、一心こめてお願いすることじゃ。

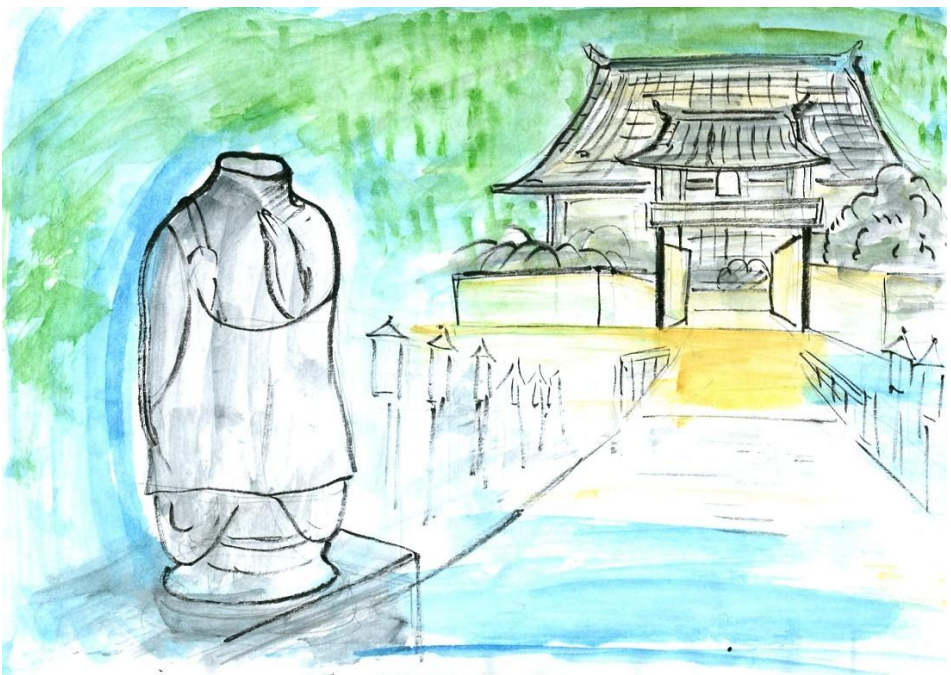
女は塩だちをして、毎晩水をかぶつて身体をきよめ、まっさらな白い着物を身につけて、真夜中にとうげの地藏さまへおまいりをした。



すると三・七・二十一日の満願の夜、地藏さまの前でふしぎな人に会い、ふいにいわずまに打たれたような氣がしたが、そのまま氣を失つてしまったそうだ。

村の者が變化とまちがえたのはその女だつた。

まもなく子どもは元氣になつたということだ。



村のものは、地藏さまを、尊んでな、年に一回、このとおげで地藏さまのお祭りをするようにになった。

そうして、この地藏さまを「首切り地藏」とよんで、みんながだいじにするようになった。

この首切地藏は、今、多治見市大原町の、普賢寺というお寺に安置されている。



普賢寺の門前にまつられている、お地藏さんです。

文 奥村幸夫

たじみ児童文学の会編著
「多治見の昔話」

昭和五十二年発行
より了解を得て転載しました。

画 成田安子